

## 令和7年度「熊本の学び」研究指定校事業 事業実績報告書

### 1 研究の内容

授業力向上 (○) ・ 道徳教育 ( ) ・ キャリア教育 ( ) ・ 特別活動 ( )  
カリキュラム・マネジメント ( ) ・ その他 ( ) (内容: )

### 2 学校の概要

(単位:人)

| プロジェクト校(研究指定校) | 児童生徒数 | 教員数 | 校長名   | 研究主任名 |
|----------------|-------|-----|-------|-------|
| 上天草市立登立小学校     | 166   | 17  | 田崎 正明 | 五島 秀樹 |

### 3 研究主題

子供と創る「学びのひとりだち」  
～主体的に学び続ける児童の育成～

### 4 研究主題設定の理由

#### (1) 社会の要請から

児童が、これからの時代に求められる資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けるためには、これまでの学校教育の成果の蓄積と課題の改善を生かした学習の質を高める授業改善の取組をより一層活性化していくことが必要である。その方途が優れた教育実践による普遍的な視点「主体的・対話的で深い学び」の実現にある。

我々熊本の教職員は、「熊本の学び」の理念のもと、提言「問いを発し、課題に主体的に立ち向かい、学びを深める」の姿と、学習指導要領が示す「主体的・対話的で深い学び」の姿とを重ね、その実現に向けた教育活動を展開していくことが求められる。このことから、「熊本の学び推進プラン」の具現化を通して、学習者側から創る学習活動を展開し、その成果検証を繰り返しながら、「児童を『学びの主体』」とする授業を実現していくことが教育活動における必要不可欠な取組であると捉える。

#### (2) 現状と課題から

本校では、「熊本の学び推進プラン」に基づき、「すすんで、自分で、自分たちで」をスローガンに掲げ、児童が主体となる学校生活の実現を目指している。その一環として、校内研究では「学びのひとりだち」の実現を目標に、教師主体の授業から児童主体の授業への転換を図り、授業改善に取り組んできた。こうした取組の成果として、児童の学習に対する意識にも変化が見られる。令和6年度県学力・学習状況調査におけるi-checkでは、「授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいたと思いますか」という質問に対して、3年生以上の81.3%が肯定的な回答をしており、主体的に学ぶ児童の姿が増えている。また、教員の授業観にも変化が見られ、主体性のある学びを求め、学習活動の充実、深化を図る授業を構想し、展開するという考え方が浸透しつつある。加えて、熊本県学力・学習状況調査(以下、県学力調査)の経年比較においても正答率の向上傾向が確認されており、「熊本の学び」の実現に向けた授業改善が進んでいるといえる。さらに、昨年度より取組をすすめているレジリエンス力を高めるパワフル・キッズ・タイム(本校が設定しているソーシャル・スキルトレーニングの時間)の取組や、学級における心理的安全性を高める学級力向上プロジェクトの成果として、不定愁訴を訴える児童や保健室への来室数が減

少した。アンケート結果からは、児童の自己肯定感や自己有用感の高まりもうかがえる。また、学級活動や児童会活動においても、児童の主体的な取組が促進されている。

今後も、児童一人ひとりが主体性を発揮しながら、生活や学習を自ら高めていく教育活動の展開にむけて、「自らの目的や力に応じて学びを選択し、友達とともに学びを深めていく姿」や「より良い生活を目指して主体的に行動する姿」の具現化を目指す。今回の研究指定の機会を活かし、児童一人ひとりが自らの個性を発揮できる学校づくりに向けて、機能的な組織を構築し、研究を推進していきたいと考えている。

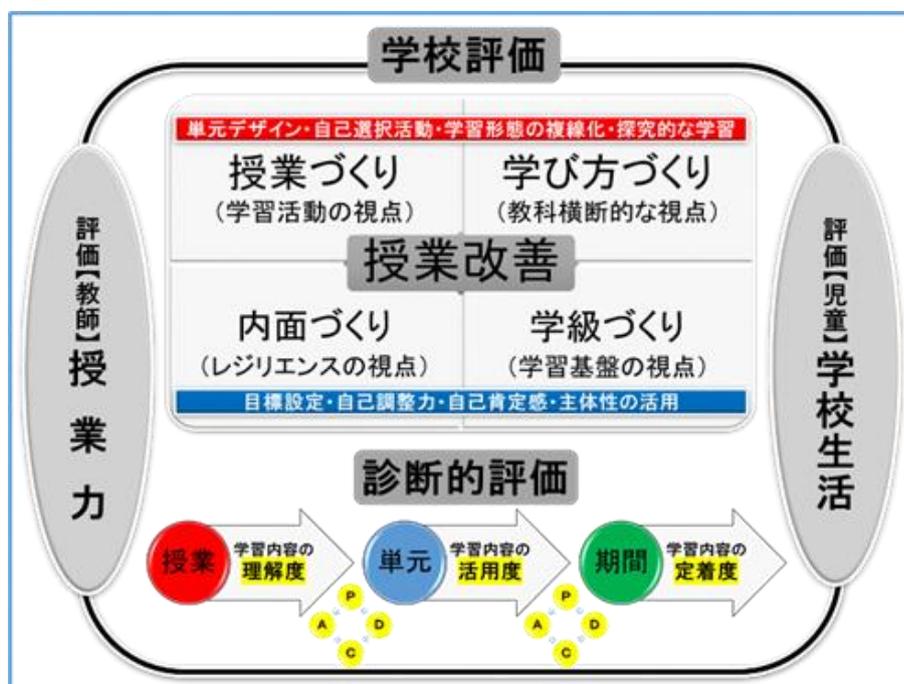
本校が目指す「学びのひとりだち」の実現は、児童を「学びの主体」へと具現することと捉える。また、「主体的に学び続ける力」の育成は「熊本の学び推進プラン」の実践的な検証である。それは「学習指導要領の趣旨を教室へ」という理念を実現することであり、社会の要請に応える教育活動である。

## 5 研究の具体的な取組内容の実際

「学びのひとりだち」とは児童が学びの主体となり、自律した学びを展開することである。「学びのひとりだち」により、児童は自らの目的や力に合わせ、自己の目指す学びを選択し、友達と共に学びを深めていく。その中で、自らの学び方のめあてをもち、学びの状況を自覚し、自己の学びを調整及び修正しながら、自らの学びを確立していくことができる。

研究主題の具現化に向け、授業改善を研究の核として、児童主体の「学習活動の展開の在り方」、児童個々の学びの成立に向けた「学び方指導・支援の在り方」等について実践を積み重ね、授業研究による授業力向上への取組を進めてきた。

### 【研究主題具現化にむけた構想】



### (1) 授業づくり（学習活動の視点）

学習が、個別最適な学びと協働的な学びが一体化し、児童個々の主体性に培われた学びとなるように、以下の視点をもとに授業づくりを進めてきた。

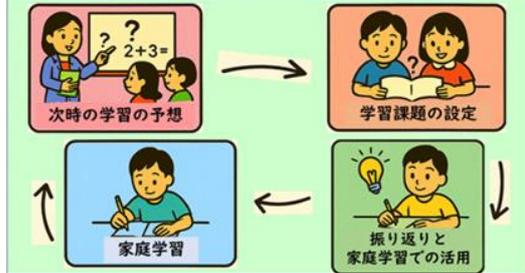
- ① 単元ガイダンスによる単元ゴールへの見通しと単元末の児童のイメージ化の促進
- ② 家庭学習と関連を図った学習過程の工夫
- ③ 学び方の選択を生かした個別最適な学びを生む課題解決時における指導支援の展開
- ④ 学び直しのある学習のまとめと振り返りを促進する指導・支援の展開

【授業づくりのイメージ図】

**単元ガイダンス**  
単元の学習を見通し、どんな力を付けるのか  
どう学びたいのかを捉える



**家庭学習**  
授業内容との関連・連動を図りながら  
課題解決への意識を高める



**学び方の選択**  
学習状況や学習の目的にあわせて学び方を選び  
主体性に培われた自力解決を進める



**学び直し**  
教師のコーディネートにより  
児童が自らの学びを再構築する



(2) 学び方づくり (教科等横断的な視点)

探究的な学習を通じた児童個々の主体的な学びを創出する総合的な学習の時間により、主体的に課題解決を図る学び方の定着を図ってきた。

- ① 児童個々の「探究の種」探しによる、学習計画づくり
- ② 情報収集の方法を選択し、友達との協働的な整理・分析・考察
- ③ 「学びの基礎基本」の活用を核とした他教科との関連

【総合的な学習の時間に係るガイダンス】

【探究的な学びの過程イメージ】

探究的な学習 単元ガイダンス

将来

これからの社会は？  
変化が激しい  
情報機器が発展

自分で考え、他者と協力して  
課題を解決する力が必要

身につけたい力

探究したいことを見つける  
様々な課題に予想をたてる  
研究の方法を考える⇒実践する  
結果をまとめ、分析し、結論を出す。  
振り返る(改善)



(3) 学級づくり（学習基盤の視点）

人間関係調整に係るプログラムを取り入れ、学級経営の充実を図り、学びの基盤づくりを進めてきた。

- ① アンケート結果を活かした児童の自発的自治的活動の促進
- ② 自己肯定感、自己有用感の向上への指導支援の充実
- ③ レジリエンスの視点を活かした道徳科の授業づくり

【学級の基盤づくりのイメージ】



(4) 内面づくり（レジリエンスの視点）

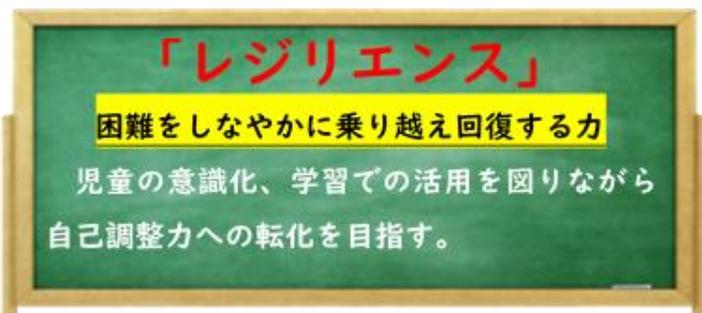
「心のもちよう」を前向きにし、学びに向かう土台を、しっかりとつくるための児童個々のレジリエンスの向上を図ってきた。

- ① 実態把握：レジリエンスアンケートの実施と家庭との連携
- ② 人間関係調整力を高める取組：パワフルキッズタイムの効果的な実施
- ③ レジリエンスを高める「目標設定」と「振り返り」及び教師の「評価」の工夫

【レジリエンスの7つの視点】



【レジリエンスの捉え方】



6 目指す成果【検証方法】

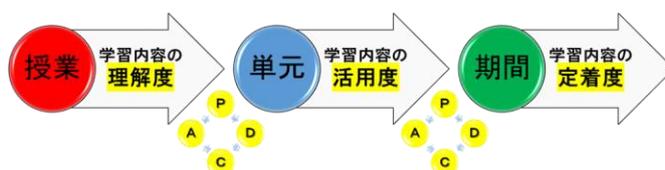
(1) 児童が主体となる授業の実現

児童が意欲的に学び、自分の学びを他の児童と共有し、協働して課題を解決していく姿が見られる授業を展開する。この検証方法として、外部評価を取り入れていく。その他、児童へ各種アンケート、県学力調査（児童質問紙調査結果）により検証を深めていく。

(2) 学力の向上

県学力調査及び全国学力・学習状況調査の結果の向上を目指す。この検証方法として、毎年度検査の結果から経年変化を捉え、各学年の結果の向上を目指す。

【診断的評価実施の考え方】



## 7 研究実施の実際

| 時 期 (月)   | 実施内容   |
|---|--|
| 5 月   | ○学校関係者への研究成果のプレゼンテーション<br>○全国学力・学習状況調査及び本校学力調査の自校分析  |
| 6 月～1 1 月<br>6 月 3 0 日<br>7 月 2 日<br>7 月 1 5 日<br>7 月 2 5 日<br>9 月 1 6 日<br>9 月 2 6 日<br>1 0 月 3 日<br>1 1 月 5 日 | ○授業実践及び研究授業による授業作り<br>・熊本県教育庁義務教育課及び天草教育事務所指導主事、上天草市教育委員会指導主事による指導・助言<br>・熊本大学教員との連携による指導・助言（授業改善）<br>・熊本大学教員との連携による指導・助言（レジリエンス）<br>・外部講師による国語教育の指導・助言<br>・上天草市教育委員会指導主事による指導・助言<br>・外部講師による道徳教育の指導・助言<br>・熊本県天草教育事務所指導主事による指導・助言<br>・熊本県教育庁義務教育課指導主事，天草教育事務所指導主事，上天草市教育委員会指導主事による指導・助言 |
| 1 2 月<br>1 2 月 1 2 日  | ○公開授業<br>・熊本の学びプロジェクト校公開授業   |
| 1 月   | ○学力向上検証改善サイクルによる取組の実施  |

## 8 市町村教育委員会の取組の実際

上天草市教育委員会研究指定校として位置付け，校内研修等への指導・助言を重点的に行った。

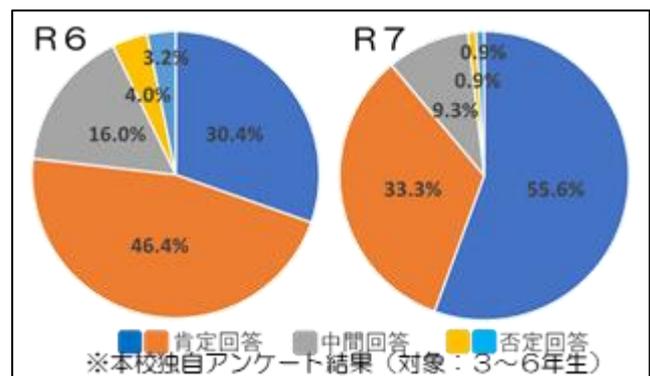
## 9 研究の成果【検証方法】

### (1) 児童アンケートの結果より

#### ①対話の質の向上

質問項目「話し合う活動を通じて，自分の考えを深めたり，広げたりすることができていますか」において，肯定的回答の割合が，76.8% (R6) から88.9% (R7) に上昇した。

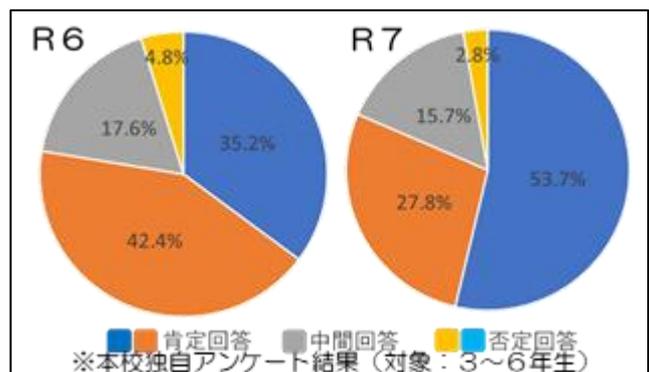
対話を重視する児童が増えたことが確認できた。



#### ②学びの変化

質問項目「授業では，課題の解決に向けて，自分で考え，自分から取り組むことができていますか」において，肯定的回答の割合が，72.6% (R6) から81.5% (R7) に上昇した。

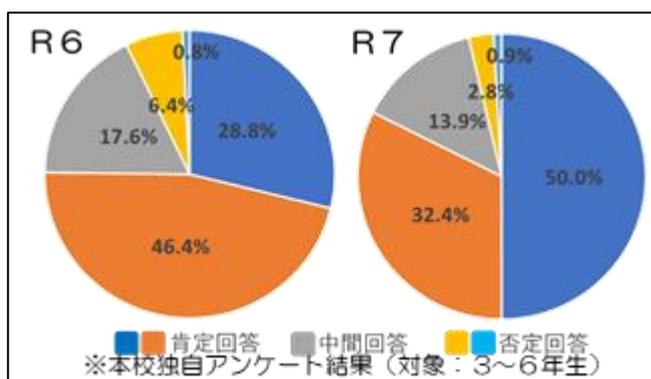
探究心が高まった児童が増えたことが確認できた。



### ③学びの好循環

質問項目「授業で、分かった点や分からなかった点を見直して学習に取り組んでいますか」において、肯定的回答の割合が75.6% (R6) から82.4% (R7) に上昇した。

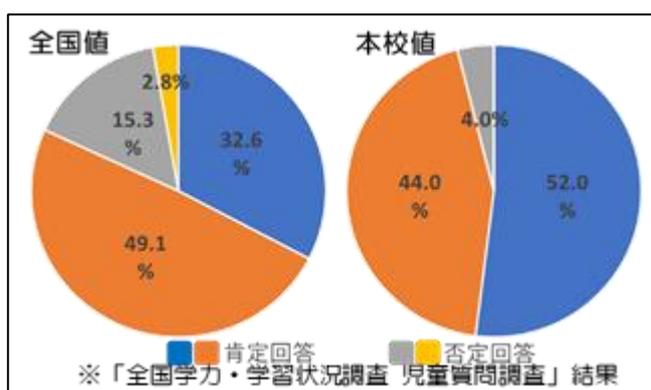
主体的に学びを振り返り、次時の学習に意欲をもつ児童が増えたことが確認できた。



### ④自分で学びを切り拓く力

質問項目「分からなかったことやよくわしく知りたいことがあったときに、自分で学び方を考え、工夫することができますか」において、肯定的回答の割合が75.6% (R6) から82.4% (R7) に上昇した。

学び方をデザインできる児童が増えたことが確認できた。



## (2) 主体的な学びの視点からみた研究成果について

本校の取組は、児童が「自ら学び方を選び、学びを調整しながら課題を追究していく姿」を育てることを中心に据えており、その成果は主体的な学びの実現度の高さから以下のような取組の成果を捉えることができる。

### ①学び方の選択が日常化し、自己調整による主体的な学びが成立している

- ・児童が自身で学び方を選択する
- ・児童が自身の学びを自己分析する

上記の児童の姿は、主体的な学びの核心である「学習目的に応じて、自分に必要な活動を自ら選ぶ」という活動が定着しつつあると捉えることができる。特に、レーダーチャート等を活用して、「分かった点や分からなかった点を見直して、次の学習に取り組んでいる」というアンケート結果の高さは、児童が自ら学習を調整する段階に達していることを示し、主体的な学びの実現を裏付けている。

### ②探究的な学習を通して、学び方が汎用化されている

- ・総合的な学習の時間では、自分の「探究の種」を見つける
- ・情報収集の方法を選ぶ
- ・分析、考察し、表現する

上記の児童の姿は、探究プロセスを系統的に展開し、この探究で身に付けた「学び方」を他教科にも活用することを目指してきた成果である。このことは、主体的な学びの本質である「学び方の転移」が実現していると捉えることができる。児童が「自分で学び方を工夫したりしながら、課題の探究を主体的に行っている」点は学びの主体化が学校全体で機能していると捉えることができる。

③レジリエンスの向上が、主体的な学びの土台を強化している

- ・レジリエンスを「心のもちよう」として重視する
- ・目標設定と振り返りを的確に行う
- ・一行日記，SST等の活用などにより自己調整力を向上させる。

上記の児童の姿により、自己調整力の向上が図られつつあると捉えることができる。主体的な学びは「学び続ける力」を前提とするが、その基盤となる感情の安定・自己肯定感・挑戦し続ける力をセットで育ててきたことは、価値あるアプローチであったと考える。「ストレス耐性や自己調整力を高め、心の安定を保ちながら学校生活を送る力を備えつつある」という児童の姿は、主体的な学びの持続可能性を示す成果である。

④学級づくりによって「自分で、自分たちで」学びに向かう文化が形成された

- ・学級力アンケートを活かした話し合いが継続する
- ・学級課題を見出す取組を考える結果を評価する
- ・自治的プロセスを経験する

上記の児童の姿の出現は、主体的な学びを支える「協働文化」を学級全体でつくる実践の成果であり、学級が主体的な学びをうながす学びの共同体として機能していることと捉える。

本校の研究は、主体的な学びを「授業づくり・学び方づくり・学級づくり・内面づくり」の4領域から包括的に支える体系を構築した。特に、「児童が目標を明確にする」「学び方を自ら選択する」「学びを振り返って調整する」「他者と協働して深める」という一連のプロセスを自発的に行う姿が見えるようになり、研究主題で掲げた「子供と創る『学びのひとりだち』」が実現に向かっていることを示していると捉える。

## 10 研究の課題と今後の展望

### (1) 研究の課題

#### ①児童アンケートの結果より

児童アンケートの項目で課題が見られたものは、「授業で、自分の考えを発表するときは、自分の考えがうまく伝わるよう資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表していると思いますか。」の質問項目である。5段階評価の肯定的回答（4と5）の割合がR6年度とR7年度を比較したとき、63.2%から67.6%に上昇していたものの、上昇率が少なかった。また、全体としても割合が高くないため、今後の指導の充実が必要であると考ええる。

#### ②学力・学習状況調査より

課題が見られたのは、国語の「読むこと」「言語の特徴や使い方」で、全国平均を上回った学年もある一方で、若干下回っていた学年も見られた。経年変化で見ると、4・5年生の国語科と4年生の算数科で向上が見られたが、全ての学年において上昇することはできなかった。学力の一側面である学力値の向上という面で取組を見直す必要性についても検討が必要と考える。

## (2) 今後の展望

成果のあった「学び方の選択」、「レジリエンス力の向上の取組」について今後も継続的に取り組んでいく予定である。

また、課題のあった「授業での発表・表現力」「国語の『読むこと』・『言語の特徴』や使い方」については、取組を改善し、学習用語の適切な理解と活用を図る活動を充実させるなど、読み取る力の向上にむけた取組が必要と考えられる。

### 1.1 研究成果の普及

12月12日（金）には、県下の小中学校に案内を出して、公開授業を行った。公開授業では、国語、算数（2本）、道徳の4本の授業を予定していたが、感染症の流行により、国語の授業ができなかった。授業研究会では、2部形式で参加者主体になるような授業研究会を行った。前半の1部は、参加者が質問したい授業について場所を選んで質問に行く形式にした。後半の2部は「児童の主体的な学びを生み出す授業づくり」をテーマとして、参加者が行っている日常の授業について改善するための協議を行った。

感染症のためできなかった授業に関しては、2月5日（木）に市内小中学校に呼びかけ、公開授業を行った。

今後は、次年度の各種研修会で取組について公開授業までの過程も含めて紹介し、普及を図る予定である。